



「ケアに限界を感じていませんか？」
病棟と住宅、2つの場で活躍する「二刀流」の緩和ケア医が
悩める医療者も、患者もより前向きになれる実践法を紹介

緩和ケアをポジティブに変える本 つらさを抱える患者にできることはもっとある

著：廣橋 猛 定価：3,080円（税込）

がんになった緩和ケア医が、患者として、医師として伝えたいことは

日々のケアに限界を感じていませんか？

東京下町で病棟と在宅、2つの場で活躍する「二刀流」の緩和ケア医で、自身もがんサバイバーの廣橋氏。様々な立場から患者と向き合ってきた著者が、悩める医療者も患者・家族も、より前向きになれる緩和ケアの実践法について解説。

患者が緩和ケアに求めるのは、苦痛の緩和だけではありません。「治療を続ける力」「希望を持ち続けるための支え」「普通の生活を取り戻す喜び」——。そんなポジティブな効果を生み出すための関わり方の極意を、多数の事例とともに紹介します。目の前の患者に、もっとできることはないのかと悩む、全ての医療者にお勧めの書。



甲状腺に多発する腫瘍 静まり返る検査室
頭のなかに次々と湧いてくる不安に
緩和ケア医師はどのように対処したのか？

緩和ケア医師ががん患者になってわかった 「生きる」ためのがんとの付き合い方

著：廣橋 猛 定価：1,540円（10%税込）

がんになった医師が教える がんの真実と誤解

2023年5月にがんと診断され、長期のがん治療を余儀なくされることを公表した廣橋猛医師。がんの緩和ケア医療を専門とし、医師として患者に正面から向き合ってきたが、いざ自身ががん患者になると戸惑うことが多くあったという。

本書は自身の体験を踏まえて、医者と患者の2つの視点からがん患者やその家族ががんと付き合っていくために必要な知識を解説していく。

がんと診断される人は年間100万人(2019年国立がん研究センター)で、がんで亡くなる人は約38万人。年間の死亡総数に対して26.5%を占める時代である。患者とその家族が「穏やかに」「快適に」過ごすためには病気とどう向き合えばいいのか。本書を読むことで、一般に知られていないがん治療の「真実」と「誤解」が理解できるようになる。



突然がんを宣告されて自分の人生とどう向き合ったのか

5000人以上を診てきた緩和ケア医が患者も経験したからこそ書けた

「生活の質」を高める新しい健康法

がんばらないで生きる がんになった緩和ケア医が伝える「40歳からの健康の考え方」

著：廣橋 猛 定価：1,540円（本体1,400円＋税）

緩和ケア医として長年、がん患者と向き合ってきた廣橋猛。そんな著者が2023年、自身もがんを診断された。幸い転移も少なく手術で全摘出に成功したが、これを機に自身の考え方が変わった。それまでは、医師として文字通り365日患者と向き合う生活を続けてきたが、自分の体に鞭を打ちながら仕事をするのではなく、自分の健康を大事にし、生活の質を高めること。若いときはある程度無理をしてもなんとかなかったが、40歳を超えたら体も思うように動かなくなる。そこで無理をするのではなく、自分の体を労わる。それが生活の質の向上につながる。

こうした考え方は、実は緩和ケアの考え方と同じなのだ。緩和ケアというと終末期の患者さんに対して行うものとイメージをされている方も多いが、病気の軽い・重いにかかわらず、つらさや痛みを取り除き、生活の質を高める、それこそが緩和ケアの本質とも言える。

本書では、医師であり、患者でもある著者が、その両方の視点で、緩和ケア的な生き方＝がんばりすぎないで生活の質を高める生き方を紹介する。がんの患者さんのご家族だけでなく、これから生きるすべての人に読んでほしい一冊。



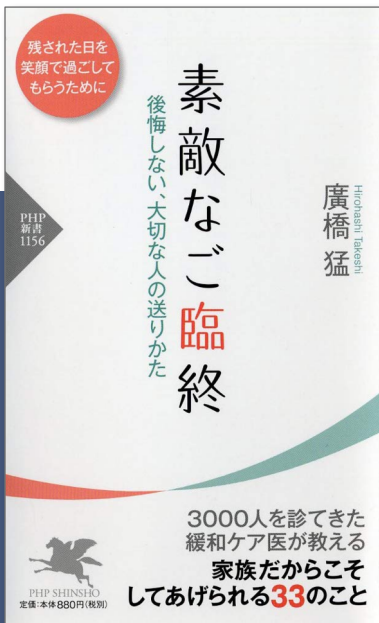
どう診る!? がん性疼痛

二刀流の緩和ケア医が教える、 病院でも在宅でも使える緩和医療薬処方のコツ (いますぐ役立つ がん患者症状カンファレンス)

著：廣橋 猛 定価：3,400 円+税 3,740 円（税込）

がん性疼痛に対する、鎮痛薬処方のコツを具体的な事例を用いて解説。緩和ケア医がどのようにして、患者の訴えから適切な処方を決めるのかがよくわかる。また痛みの評価方法から薬の選択・切り替え、副作用対策など基礎から実践的な内容までが1冊で学べる。

痛みのスケールが改善するだけが目的ではなく、患者の希望・状況に応じた最善の処方の仕方についても学ぶことができる。



3000人を見てきた 緩和ケア医が教える 家族だからこそ してあげられる33のこと

素敵なご臨終 後悔しない、大切な人の送りかた

著：廣橋 猛 定価：968円（本体価格880円）

大切な人の余命を前にしたとき、家族や周りができることとは。
心のケアから、実際の痛みを知る方法まで、緩和ケアの第一人者が解
説

家族や友人など、大切な人が余命を告げられたとき、周りは何ができるのか。在宅医療と病棟での緩和ケアに携わる緩和ケア医である著者は「医師ではないからこそ、できるケアがある」と説く。

本書では「痛いときは家事などをさせた方がよい」「息苦しいときはうちわで扇いであげる」「すべての辛さを緩和してくれるマッサージの方法」といった具体的なケアの技術に始まり、最期の時に向かって起こる体や心の変化、最期を迎える場所をどう決めるかなどを専門家の立場から解説。

死ぬことは苦しいことばかりではない。病を得た本人も家族も納得し、笑顔で送り出せる「素敵なご臨終」を迎えるために、知っておきたいことを医学的な用語を使わずに、図などを用いてやさしく読みやすく紹介する。